

自分の考えや思いにとらわれていると、人の意見に耳を傾けることができず、気がつかないうちに周囲に対して壁を作ってしまうことがあります。

自営業のAさんは、最近、自分が子供を叱ってばかりいることに気づきました。後片づけをしないといと何回も注意するのですが、子供が言い訳ばかりするため、イライラする毎日を過ごしていました。

特に仕事を立て込んでいたり、時間に余裕がなかったりすると、Aさんは自分の感情がコントロールできず、叱る回数も増えていくことに頭を悩ませていました。

ある日の経営者モーニングセミナー後の朝食会で、隣に座った友人に子供や家庭のことについて愚痴をこぼしたところ、「子供にあれこれ言う前に、自分の仕事に対する態度や物事の始末ができていないか振り返って見たことはある？」と言われたのです。

その言葉を聞いた時、表情には出さなかったものの、内心ドキッとしました。なぜなら、Aさん自身が納品の遅れや欠品に対して、謝罪よりも先にお客様に言い訳をしたり、自己を正当化する発言をしたりしていたことに思い当たったからです。

Aさんは『万人幸福の葉』に書かれている「子は親の心を実演する名優である」という言葉を思い出し、自らの態度を振り返り反省しました。

その後、Aさんは子供たちのすることのできるだけ口を出さず、自分が変わることを決意し、仕事場や自宅の掃除や周囲の整



自分が変われば 相手も変わる

理整頓を実践しました。

それから数カ月後、いつの間にか子供たちが自主的に片づけをするようになり、Aさんが叱ることもなくなっていました。

Aさんは今までの自分を振り返り、相手から失望されたくない、信頼をなくしたくないという気持ちが強くなったために、言い訳が多くなってしまうっていったと実践を通して気づきました。自分の心の表れが子供たちに反映していたと思いつたのでした。真摯に実践に取り組めば、自分でも変わることができるので実感したAさんは、今も素直な気持ちで実践に取り組んでいます。

人は、自分の身の回りに起こった出来事や周囲の変化に対して「こんなものだろう」と勝手な解釈をすることがあります。そして何か問題に直面して落ち込むと、言い訳をしたり、自分を責めたり、時には自暴自棄になってしまうことがあります。

そして、その解釈を正しいものと思いつくばかりか、周りも自分と同じ考えだろうなどと偏った見方になる場合もあります。その結果、自分が変わるための挑戦する気持ちが失われてしまいます。

「人を変えようとすればまず己を改めるにしかず」、環境を改めようとすれば、まず自分が変わることである。「二」に、対者に対応する倫理の原則がある。

〔純粋倫理原論〕二一四頁)

変化を恐れず、挑戦することによって、人はいつでも変わることができると思いたいものです。